

村田正志博士著

『相楽家蔵結城家文書の概要及び解説』

山 本 信 吉

わが国はよく文化財の宝庫といわれる。その意味は、飛鳥、奈良時代以降の各時代の絵画、彫刻、工芸品等の代表的遺品、あるいは学術上重要な典籍、文書等が数多く伝存していることをいうのであろうが、そのことは同時に、未だ価値が明らかにされていない文化財がなお埋れていることをも意味している。ことに典籍、文書の類になると、まさにわが国はその宝庫であって、古代、中世の遺品に限ってみても、年毎に学界に新紹介される遺品は、意外とその数が多いものである。これは、京都を中心とする社寺の庫が未だ充分に調査されていないこと、あるいは旧公卿、大名家など個人の秘庫が大切に保存されていて、必ずしも一般に公開されていないことにもよるものと思われる。

ただ、こうした所謂新発見は、研究者の普段の努力と、それに伴うやや好運な機会があれば、そう珍らしいことではない。難かしいのは、すでに一応の評価を得ているものの中から新しい価値を発見することであろう。ことに、一旦は疑問を持たれた写本、または写しと認定された文書は、その判定が爾後に取扱う研究者に先入観を与える場合が多く、それ自身が持つ本当の価値は兎角看過されがちである。また一度否定された価値に気附く者があったとしても、それを良しと論証することは仲々に困難である。そうしたことを考えると、判断が誤れたため世に埋もれ、あるいは間違ったものとして伝えられている遺品も案外に多いと思われる。

この度、村田正志博士の著になる『相楽家蔵結城文書の概要及び解説』(昭和五十四年三月、福島県須賀川市教育委員会刊、B5版、本文四十二頁、図版四十頁)に収められた白河結城文書(三十通)は、その価値の判断に正確さを欠いたため、危うく埋もれそうになったものが、学殖深い研究者の見識によって、中世史上重要な文書として蘇った好個の代表例といえることができる。

中世に陸奥の豪族として活躍した白河結城家の子孫である相楽家(福島県須賀川市)に伝来したこの文書は、南朝関係史料として著名な白河結城文書の一連の遺文で、その一部はかつて江戸時代の天和三年徳川光圀が史臣佐々宗淳をして調査せしめ、また明治に入って修史館が探訪し、大日本古文書、結城文書纂、近くは福島県史料編にも収められた。しかし、その文書自体はいつしか写と考えられていて、例えば「福島県関係文書の所在及び利用状況」(昭和四十五年二月、古文書学研究第三号所収)には、この「相良文書」について「(前略)、ただし本文書は、すべて精写本で、原本ではない。(後略)」と断定されている。写とした理由については根拠を挙げていないが、「(前略)大日本史編纂を志した徳川光圀の召上げるところとなり、模写本を還されたのである。」と記しているから、恐らく先人の倉卒な誤断の伝承に盲従したものと思われる。

しかるに中世南北朝時代の研究の權威であり、かつ古文書学の碩学として知られた村田博士は、昭和五十年、須賀川市郊外の南朝史蹟宇津峯(埋峯)登峰の傍、この文書を実見され、一通を除き他はいずれも当時の原本であることを確認された。これによって南北朝時代研究上に新たに文書原本二十九通を加えると共に、南朝の忠臣として名高い北畠親房の自筆文書七通の存在が知られたわけで、その功績は極めて大きいと評することができよう。

いわば新発見ともいふべきこの相楽家所蔵になる白河結城文書は、延元四年五月四日北畠親房御教書を上限とする南北朝時代の文書三十通を存する。この内訳は二十五通が北畠親房関係文書で、他に足利尊氏文書二通、左中将道世自

筆書状、水野光道自筆書状、堀河具信書状等(江戸時代等)各一通であるが、中心を占める北畠親房文書は、陸奥国宣一通、御教書十四通、推挙状一通、事書三通、書状六通で、このうち、事書一通、書状六通は親房の自筆である。これらはいずれも延元三年(暦応元年)から興国四年(康永二年)まで常陸國小田、関河城にあった親房が、白河の結城親朝に充て来援を求めたものである。足利尊氏文書は御判御教書一通と自筆書状一通を収めている。

本書は村田博士がこれらの文書について、概要と解説とに分けてその内容を詳述され、南北朝史研究上に占める価値を明らかにされたものであって、まず概要において、本文書の相楽家における伝領、文書の形状、北畠親房を中心としてみた文書全般の内容と当時の常陸国における南朝の動向、さらにこの文書に含まれる足利尊氏文書の意味について論述されている。この相楽家文書の特徴は、そのほとんどが小切紙に記された所謂切紙文書(例えばこの文書中最小の切紙は第一巻第二通の延元四年五月四日北畠親房推挙状で、縦一〇・六センチ、横八・七センチである)よりなっていることであるが、博士はこれらの形状が南北朝時代、ことに南朝方の文書に多いことを指摘され、原本であるこの相楽家所蔵文書によってそれが更に確認されることの意義と、原本の持つ価値について注意されている。又、文書全般の概要の中で述べられた北畠親房文書の説明は、この相楽家文書の歴史上に占める重要性を知る上に適確なもので、極めて有益である。

概要の後半には、この文書に対する江戸時代以降の採訪の歴史と本文書を博士が原本と確認するに至った経由、及び修理に伴う整理と成巻の次第の概要が収められているが、この中に記された史料取扱の基本的問題、つまり文書自体の正確な調査を伴わず、安易に既往の写本等によって行われた史料編纂がいか

第二部の解説は各文書毎に、名称、法量、既往の採録状況、本文積文を掲げ、解説を加えられたもので、その解説は南北朝史に最も通曉された博士の学識を反映して達意明解である。巻末に附された「相楽家蔵結城文書参考年表」と併読すれば、本書は文書解説といいながら、常陸における南北朝史綱要として利用することも出来よう。

又、末に附載された全文書の図版は、写真も読解の便を計って充分な大きさにして掲げられ、主要な文書については現寸大のものも収められている。読者は、この図版と本文中の積文を照合することによって、北畠親房文書、とくにその自筆文書を筆跡と併せて理解することが可能であり、本書の刊行が学界に裨益する所は大きいと認められる。

なお、本書を通読して感じるのは博士の文書に対する非常な熱意と愛情である。その態度は文書の解説文の行間にも滲み出て、一読する者の心を動かすものがあるが、その姿勢の具体的な現れは、本書の修理にも窺われる。研究者は文書（典籍でも同じであるが）が史学研究の根本史料であるということで非常に大切にす。ただし、その態度の中には歴史史実を伝えた貴重な内容がいかんにか活用するかということに心を奪われて、文書原本の保存については心及ばない場合が多いようである。しかし、文書の持つ無限の史料価値は常に文書原本に立戻ることによって新たにされることを考えれば、文書を取扱う者は、利用と共に先ずその保存に心を懸けるべきであらう。ただこの当然のことが仲々行われないのが学界の実情である。この点、博士がこの文書保存に努められた姿は本書の中に淡々と語られているが、その努力は研究者として見習うべきものであって、その事業を後援された国士館大学の配慮と共に、その功績は永く記憶されるべきものと思われる。

（文化庁主任文化財調査官）